

2024 9

ナイル

現代短歌ナイル

熱海大会報告

ナイルキャンパス／五代目神田伯梅

美貴子ワールド／松本美貴子

偶然の糸を遊ぶ【3】

未来への扉／大矢有朔

7月号作品批評／宮本史一(心の花)

NILE CAMPUS

303

伯梅閑話 —— 伯治襲名 ——

小村井敏子（五代目神田伯梅）

伯龍が四代目神田伯治になつたいきさつはこうだ。

講談の先輩たちが相談して、伯梅を真打にしようとした。講談組合の番頭であった木偶坊伯鱗（でくのぼう・はくりん）が使者となつて、昭和二十二年三月、五代目神田伯龍に伝えに来た。

「若い真打がないから、伯梅を真打にしようという相談がまとまった。小伯山でどうか」とすると、五代目伯龍は、「俺が伯山にならないんだ。小伯山では、小の字が生涯取れないぞ」と言い、「伯治になれ」。言われたとおりに、伯治になったが、あとで、師匠の兄弟子である伯鱗に聞くと、一週間違いで兄弟子だった三代目神田伯治にいじめられたので、弟子を伯治にして、「こら、伯治。バカ、間抜け」と言いたかつたのだらうという。

三月に話があつて、四月に襲名だ。急なことでもあり、大慌てで準備した。太平洋戦争直後の混乱期。名入りの扇子を作ってくれる扇子屋を探すのも大変だった。が、混乱期で配り物をさしあげるべきご贔負のお客様はいなかった。手ぬぐいと扇子（一本二十円）は、講談師のお仲間に配つただけだった。

襲名披露は有名会のあと、人形町の講談定席、貴扇亭（きせんてい）で十日間。ところが、貴扇亭の初日、五代目伯龍は、弟子の伯治の悪口をさんざつぱら言つて下りた。楽（らく・千秋楽・最終日）には来たが、あとを抜いた。来なかつたのだ。ちょうど、七代目一龍齋貞山の襲名披露があり、師匠は、その口上に出たので、弟子の伯治の襲名披露に二日間しか来なかつたのだ。

（ナイル2005年6月号より）